

---

## メガネの魔法 6 ～君に印(しるし)をつけさせて～

シマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メガネの魔法 6 君に印をつけさせて

### 【Nコード】

N6427P

### 【作者名】

シマ

### 【あらすじ】

俺、山崎匠。9歳年下の恋人兼部下の遠藤裕美は、モテるのに自覚0。自覚のなさにモヤモヤしていた俺は、決意をしてある計画を立てた……「メガネの魔法」その6 匠視点

「なあ、遠藤さんって可愛いよな」

「遠藤？……あの子か、何時も笑ってて癒し系だよな」

会社の談話室で聞こえた会話に、俺、山崎匠は男達を睨んでから立ち去った。

俺の彼女、遠藤裕美は、部下で恋人。粒羅な瞳と笑顔が可愛い彼女は、本人の自覚はないがモテる。本人は、モテない冴えないメガネっ子と言いつ張る。

俺以外に男性経験がないなんて、奇跡に近いと思う。しかし、社内恋愛の為周囲には秘密にしていた。

いっそのこと指輪でもしてくれと虫除けにもなるし嬉しいが、アクセサリーに興味はなく指輪より車。色々考えていると、廊下で深いため息を漏らしていた。

「印……つけたい」

思わず口から漏れた本音に苦笑しながら、午後の仕事を終わらせると、旅行の準備共にもう一つ……小さな箱を準備した。今度の旅行で、ある決意を秘めて……

翌朝、曇り空の中の出発。心配した天気も旅行先に着く頃には、日が射していた。

「匠さん！見て見て！！これ可愛い〜」

俺の少し先を歩きながらはしゃぐ彼女は、回りの男の視線に気付かずに飼い犬”イチ”と並んで歩いている。

頼むから俺以外に、その笑顔も、その声も触れさせないでと願うのは、そうとう彼女に参ってる証拠？

「足元に気をつけて」

「もう！大丈夫ですよ」

頬を膨らます彼女が可愛くてギュッと抱き締めると、苦しいと抗議しながら背中にも手を回した。

「匠さん、お疲れですか？」

「うん？何で？」

「最近、ため息が多いですよ」

はぁ……何で気付くかな、この子は……普段は鈍い癖に、妙に鋭く俺に隠し事をさせない。そんな彼女に苦笑を漏らすと、彼女は首を傾げていた。

「見せたい物があるだ。行こう」

「見せたい物？何ですか？」

「見てからのお楽しみ」

不思議そうに俺を見る彼女の手を引き、林を抜けた先にある小さな教会へと歩いて行った。建物を見て、何度も瞬きした後、頬を薄紅色に染めて微笑んだ。

「綺麗ですね。こう言つの見るの好きです。ありがとうございます」

お礼を言った彼女が光を浴びて輝いていて……回りなんて見えなかった

「本当に……綺麗だ」

「綺麗ですね。このステンドグラス」

「違う」

「え？」

否定をした俺に、驚いた顔を向けてきた。目が真ん丸に見開いて可愛い

「君の方が綺麗だよ……手、出して」

「匠さん？」

首を傾げながら差し出された手の上に、ポケットに隠していた小さな箱をそつと乗せると、更に驚いて……目がこぼれそうだ

「え？こ……これ……」

「何だと思う？」

ちよつと意地悪な質問をすれば、彼女は困った顔をしていた。これ以上困らせてはまずいかな？

「俺のものになって下さい」

「……」

「何で泣くのかなあ」

滅多に泣かない彼女が、静かに大粒の涙を溢して……これは、これで別の意味で辛い……理性を総動員して押し倒したい衝動を堪える。押し倒すかわりに目元に唇を寄せて、涙を舐めるとくすぐったそうに身を振った

「お嫁さんになって、ここで一緒に誓ってくれる？」

「私で良いんですか？」

「君じゃなきゃダメなんだ」

「……嬉しい……」

満面の笑みを浮かべて俺の胸に飛び込んできた彼女をしっかりと抱き止めたが……うゝん。今さらだけど……やっぱりちゃんと言葉にして欲しいと思うのは、俺の我が儘か？……拗ねるかな？と思っただけ、はつきり聞きたくて、もう一度、口にした

「返事は？」

「え？」

キョトンとする彼女に、苦笑しつつ手のひらに乗ったままの箱を指さした

「プロポーズの返事が欲しいんだけど……お嫁さんになって？」

「は……はい、宜しくお願いします」

真っ赤な顔で返事してくれた彼女にキスをして、耳元に大事な言葉を囁く……

「裕美、愛してるよ」

「私も……匠さんを愛してます」

箱から出した指輪を、彼女の指につける瞬間、幸せで胸が一杯になった

俺のモノだと言う印しるし

君を一生、大事にする決意の印しるしをつけさせて

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6427p/>

---

メガネの魔法 6 ～君に印(しるし)をつけさせて～

2010年12月25日15時50分発行